

高敏感者（HSP）と自閉スペクトラムの感覚特性(2)

—感覚プロファイルを用いた分析—

○西岡千里¹・吉田弘司²

(¹比治山大学大学院, ²比治山大学)

目的

自閉スペクトラム症者（以下 ASD）の感覚の特徴として、感覚過剰反応、感覚低反応、感覚探求の3つがあげられ（高橋・神尾, 2018）、DSM-5から診断基準にもその感覚特性が追加された。

Highly Sensitive Person（以下 HSP）も聴覚・視覚・触覚・嗅覚などに特異な感覚処理感受性を持つ（Aron & Aron, 1997）とされている。このように、両者とも特異な感覚特性を持っているが、その感覚の類似点や相違点を研究したものは少ない。そこで、本研究では、HSP 傾向と ASD 傾向の類似点と相違点を感覚プロファイルを用いて検討した。

方法

参加者 学部・大学院生 100 名が参加した（有効回答数 89）。

調査手続き HSP 傾向は、高橋(2016)の Highly Sensitive Person Scale 日本版 (HSPS-J19) を使用した。ASD 傾向には、若林(2014)の AQ 指数を用いた。感覚については、日本版青年・成人感覚プロファイル(以下 SP)を用いた。SP は、低登録、感覚探求、感覚過敏、感覚回避の 4 象限によって感覚処理のパターンが説明されるものである。

倫理的配慮 本研究は、比治山大学倫理審査委員会による倫理審査を受けた（申請番号 2211）。

結果

HSP, AQ, SP の全ての下位尺度を用いてクラスター分析 (Ward 法) を行ったところ、参加者は 4 つの群に分かれた (I 群 14 名, II 群 28 名, III 群 23 名, IV 群 24 名)。これらの HSP 傾向と ASD 傾向を分散分析によって調べたところ、どちらも群の主効果が有意で、HSP 傾向は III ≧ I > II ≧ IV の順、ASD 傾向は III ≧ II > IV の順 (I は II と IV の中間) となることがわかった (Figure 1)。

これら 4 群の感覚特性を調べたところ、感覚過敏は III > II ≧ I > IV、感覚回避は III > II > IV (I は II と IV の中間)、低登録は III ≧ II > IV ≧ I、感覚探求は IV ≧ III > II ≧ I の順であった。

AQ 下位尺度を検討したところ、コミュニケーションの問題は III ≧ II > IV ≧ I の順、注意の切り替えの問題は III > I ≧ IV の順 (II は III と I の間)、

細部への注意は有意な主効果なし、ソーシャルスキルの問題は II > IV の順 (III と I はその間)、想像力の問題は II > IV の順 (III と I はその間) となっていた (Figure 2)。

Figure 1 4 群の HSP 傾向と ASD 傾向

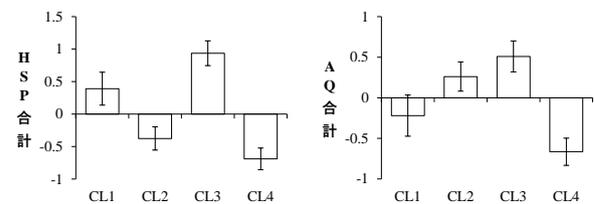
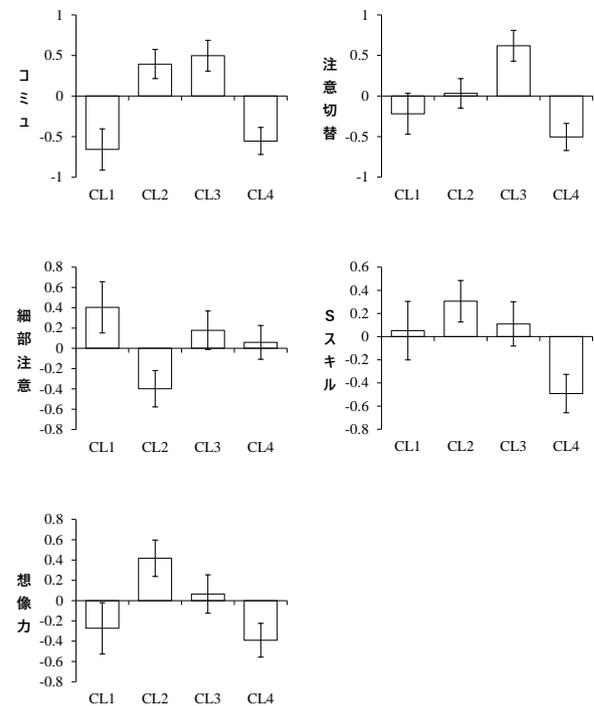


Figure 2 4 群の AQ 下位尺度の傾向



考察

本研究で HSP 傾向の高かった III 群と I 群のうち、III 群は感覚の過敏と鈍麻、回避と探求を併せもっていたが、彼らはコミュニケーションを苦手とし、注意の切り替えが困難であるという ASD 傾向を示した。それに対して、I 群は特異な感覚特性も ASD 傾向も示さなかった。このことから、HSP 傾向者には、異なる感覚特性をもつ人々が含まれており、特殊な感覚特性をもつ者が ASD 傾向も示すことがわかった。